Ⅱ　開町以前の情勢

一、一向宗の繁盛

越中における一向宗のはじめ【30】

越中に真宗が伝播したのは、承元二年［一二〇八］に開祖親鸞が越後に流された時。また鎌倉末期に曾孫覚如が越中を通り東国に赴いた時と伝えられる。

覚如の長子在覚が越中水橋門徒を獲得して、延文ごろ［一三五六ごろ］に越後柿崎まで延教している事実がある。

この在覚の弟子綽如（本願寺五代寺主）が永和元年ごろ［一三七五ごろ］から越中に来て、明徳元年［一三九〇］には瑞泉寺（井波）を創建し、真宗発展の礎石とした。しかし、綽如がまもなく没して瑞泉寺は空白になっていた。四〇年後、綽如の孫宣祐が入寺したが振るわず、加賀国二俣（本泉寺）に還った。

蓮如の活動【30】

宣祐の甥蓮如は宝徳元年［一四四九］に初めて北国に下向し、寛正六年［一四六五］には次男蓮乗に瑞泉寺や本泉寺の安定を図らせた。

その後蓮如は南砺を横切って瑞泉寺に進錫したらしいが、文明三年［一四七一］越前吉崎に拠点を得てからは真宗の北陸進出は目覚ましいものがある。

このころに古国府勝興寺が蟹谷庄土山に創建され、川上では専徳寺（金戸）などが一向宗に転宗したと伝わる。

蓮如の真宗は、御文や巧みな説教によって庶民に浸透し、加賀・越中は急激に本願寺門徒化した。門

徒建立の寺が増え、他宗の諸寺や土豪の風当たりも強かった。

「闘争記」によると、文明一三年［一四八一］福光石黒党の棟梁石黒光義が医王山の僧徒などと瑞泉寺を襲撃しようとしたが、田屋河原で敗れ、安居寺に逃れて自尽したという。これらは蓮如の布教を契機として、新旧勢力の交替が表面化したものといえる。

蓮如の吉崎在住は応仁の乱の最中であって、社会の誤解や紛争に巻き込まれたため密かに関西に去った。文明一八年［一四八六］になって山城の山科に寺地を得て本願寺を再建した。

川上地方における一向宗の繁栄【3-1】

寺伝などによれば、教念寺（城端）は文明四年［一四七二］僧明西が創建、専徳寺（金戸）は明応三年［一四九四］に真言宗から転じ、文亀元年［一五〇一］に瑞泉寺（城端）を僧了信が、安楽寺（蓑谷）を僧浄恵がはじめた。大永四年［一五二四］に僧了順が真言宗西方寺跡に西光寺（細野）を開いた。これらは川上坊主衆の分子として門信徒の統制に大きな役割を演じた。

「蓮如様御遷化之記」によると、大永三年［一五二三］に蓮如二五年忌の仏事が山科本願寺で催され、三月二三日の振舞いは越中河上衆と五か山衆が進上したもので、本山への忠勤と河上衆の位置が分かる。なお、このころの善徳寺は未だ微力であり、もっぱら瑞泉寺によって統制されていた。

実如が没した後、孫の証如（一〇歳）が本願寺第一〇世の法灯を継いだが、戦国の波は本願寺にも迫った。やがて対立していた日蓮宗徒と細川晴元の連合軍が山科に迫り、無量の荘厳仏国のごとしと称えられた蓮如建立の伽藍は戦火で焼失した。「善徳寺文書」[1]に証如が山科の回禄（焼失）を加賀の門徒などに報じた天文元年［一五三二］の文書がある。

この後証如は大坂の石山坊舎を修め、宗門の発展を図った。天文五年［一五三六］には上意によって細川氏らとの確執も解け、「天文日記」によると、これを祝して河上十郷の門徒たちは八〇貫文の祝儀を進上した。「天文日記」[2]の天文六年［一五三七］の記録に、河上衆・専徳寺（金戸）や祐道（大鋸屋）など、城端地方の信徒たちや篤志坊主の名前がのこる。

この前後、河上衆は農民の共同活動体として、本来の信仰的立場のほかに、必要なときには武器を

（1）善徳寺文書
就山科回禄之儀、其砌飛脚差下候。不相届候哉。……
天文元年　証如（花押）
加州坊主衆中

（2）天文日記
天文六年今日斎勤候。越中五ケ山並河上両所之衆、申事には、斎つとめ候て難有候条……
天文六年

とって土一揆化し、自衛的な立場をとることも多かった。

二、川上一揆の活動

高瀬郷地下人の反抗【34】

越中の守護畠山氏は幕政参画のため留守がちであり、守護代として神保、椎名などの諸氏を配置したが、守護代も常に在地はしなかった。そこに国侍である地下人活躍の余地があった。

「東大寺図書館文書」[3]によると、高瀬郷の地下人ら一八名が永享八年［一四三六］守護代下長氏の代官就任を拒否し、強訴して成功している。

寛正元年［一四六〇］には、地下人が農民や一向宗徒を誘って土一揆を起こさせ、年貢を拒否している。地下人とは農民ではあるが、多くの下人を持つ名主や地侍でもあった。一向宗によっていかに農民が成長したかを示す。

門徒衆の団結【34】

封建領主支配下の農民が本願寺の門徒として組織されると、土豪や武士の地位が不安定となる。文明一三年［一四八一］福光の石黒氏が安居寺や医王山の僧徒と結んで、河上衆と一戦を交え、かえって敗北滅亡したのは好例である。

荘園領主の隷民であった農民は、名主を中心にした村単位の狭い結合であったが、門徒化によって末寺坊主を中心とする「講」結合が生まれ、惣的結合として広域化していった。末寺坊主の社会的地位は村落統合の有力者であり、農民と共に行動し、本願寺・有力末寺・道場・門徒とピラミッド型に組織されて物心両面で結ばれていた。

一向一揆【35】

応仁の乱の中ごろ、加賀の守護富樫家の内紛から、長享二年［一四八八］富樫と結ぶ土豪と、門徒農民と結ぶ土豪による大一揆が勃発した。門徒側は加賀・能登・越中・越前から二〇万と号する軍をもっ

（3）東大寺図書館文書
せつかん候之間、御百姓等たいくつ仕、或はかけ落を仕、又は譜代の地、名田をすて、立力もなくなりはて　守護代下長氏
永享八年

て、富樫政親を高尾城（加賀）に殲滅した。

以来、加賀は一揆支配（本願寺の領国化）の国と化し、土豪、坊主、農民の代表による合議制国家として一世紀を過ごす。このことは加賀と境を接する川上一帯に影響し、封建支配者との激突は免れなかった。

「専光寺文書」によると、蓮如は前記、長享の乱に対して有力末寺である専光寺（加賀）を叱責している。蓮如は教線拡大のためにも、門徒農民の反抗や、本願寺や一向宗の発展が圧迫されることを恐れた。このため、「守護・地頭を粗略にするな」、「年貢は完納せよ」、「外には法王を、内心には信心を蓄えて、世間の仁義を本とすべき」と諭している。

この教説は、戦国大名の領下に教線を伸ばすために第九代実如によっても門徒に強調された。

一揆衆の活動【36】

永正三年［一五〇六］の本願寺と越前朝倉氏との闘争は越中にも波及した。越中の門徒は加賀と結んで一揆を起こし、守護代神保、遊佐氏と戦った。飛騨・照蓮寺（白川郷）までが越中に出陣している。

「越賀雑記」[4]によると、永正三年［一五〇六］実如はこの戦いに対して「誠難有候」と門徒を褒め、必要に応じて城塞を築いて防御に当たるように、越中四郡の門徒に命じている。このことは、後の戦国領主や在地土豪との複雑な関係を生み、宗門のための一揆を要求されることになる。

本願寺統制力の強化【37】

本願寺を証如（第一〇代）が継ぐと、坊官下間氏の専横があり、加賀を領国化しようとして一揆が勃発した。瑞泉寺、勝興寺、川上十郷・蟹谷などの信徒が下間氏と戦い、失脚、処分させた。

「天文日記」[5]によると、乱後数年を経た天文六年［一五三七］になって、遊佐氏から越中川上と太海郷の代官職を還付するよう懇願されたのに対し、証如が和談に応じている。

また、このころ若松本泉寺（加賀）の蓮悟が証如に反抗した。証如は蓮悟を終生破門とした。成人した証如は破門という精神的な極刑を用いるに至って、教団統制の絶対権力を獲得している。

その後、顕如（第一一代）を迎えた世は、戦国動乱も統一への機運も見えたが、教団は織田信長を法

（4）越賀雑記
於今度其国各忠節共、誠難有候。即使者可差下候得共……
実如　御判
永正三年
越中　坊主衆中

（5）天文日記
先日自遊佐方申候太海郷事可申下候。但彼国（越中）和談候へ共各別の田畠不被返付候間……
証如
天文六年

敵として戦を交える不幸な時代となり、前途多難となる。

三、開町と善徳寺の移転

善徳寺のはじまり【38】

善徳寺は、瑞泉寺や勝興寺ほどの古い歴史はないが、それに次ぐ寺史・寺格の由来がある。同寺には若干の古文書と寺史記録があるが、ほとんど近世の編集・報告なので、必ずしも全てが真実を伝えているとは言えない。特に同寺の創建を明らかにするものは乏しいが、歴史が模糊としているのは遺憾である。

天文一〇年ごろ［一五四一ごろ］の古写本の系図[6]（木倉豊信氏蔵）に、実円の註として、善徳寺の寺号が実円に付与されたとある。これは事実をもって注録したものと思われ、現存史料で最も古い部類に属する。

実円には一男三女があって、嫡男円勝は善徳寺を継いだ。「廓龍山善徳寺譜略記」[7]（宝暦ころ［一七五〇ごろ］）や続真宗大系本「日野一流系図」[8]によれば、本願寺（九代）実如により実円の代に善徳寺の寺号が許されたとみられる。

「善徳寺文書」[9]には永正頃［一五〇五ごろ］の本願寺の礼状があり、実如の書状と伝えるものも秘蔵してある。また、善徳寺因勝の慶長九年［一六〇四］ごろの書状からも察せられる。

一方、「善徳寺譜略記」[10]で開基を文安元年［一四四四］蓮真としたものや、「善徳寺記録」[11]の加賀藩への由緒書に文安二年［一四四五］実円開基とあるが、幾多の矛盾がある。

とにかく実円の代に法林寺村に砂子坂（加賀）より移建され、「寺譜略記」[12]によれば二世円勝の代に福光村に移転したといい、「城端御坊由緒略記」[13]などと一致する。

実円も円勝も年頭に五〇疋の引出物を進上しており、善徳寺の経済力の一端がわかる。

城端へ移建【44】

（6）古写本の系図
実円　善徳寺ト云寺号此代ニ被下畢
天文一〇年頃

（7）廓龍山善徳寺譜略記
初世実円字玄広（中略）止住法林寺南麓山本里、産二男三女矣……

（8）日野一流系図
……法名実円。二位。号善徳寺。始賀州砂子坂住、後越中法林寺住。又山本里住。……

（9）善徳寺文書
毎年両度御書前々は御免なされ候。実如上人以来御代々皆々其分にて候。　善徳寺　因勝
慶長九年
森時左介

（10）善徳寺譜略記
廓龍山善徳寺開基者、本願寺五世綽如上人……当寺建立文安元年、蓮真始而住加州河北郡井家庄砂子坂而、立一寺譲於実円。号善徳寺二位矣。
文安元年

（11）善徳寺記録
就御尋申上候
当寺建立ハ文安二年実円開基、従其以来円勝・祐勝・空勝……　善徳寺　玄勝
文安二年
永原左京・笹原織部殿

（12）寺譜略記
二世円勝、字孝政先住実円嫡男又住福光里。産……

（13）城端御坊由緒略記
天文年中第三世円勝代従山本村福光村江移住、城ケ端に相移之後坊跡を以為……

善徳寺の城端移建の永禄二年［一五五九］説は、第三世祐勝の四〇歳ごろで、「由緒略書」[14]に同年城ケ端城主荒木大膳の請により福光村より移住とあり、「城端御坊御由緒略記」[15]でもほぼ同様の記録がある。

当時の真宗寺院は貧弱なもので経済力も弱く、土豪荒木氏の館端に敷地をもらって城門を寄付されたとしても、ただちに城端町に発展したとは考えられない。

天正元年［一五七三］説は越中史料所収「城端御坊善徳寺由来」[16]にあるが、この資料は幕末ごろの編集らしく、詳細な記事ではあるが新しいようだ。「三州志・故墟考」[17]でも同年説を示す。

畑家文書「掌海拾遺」[18]には天正元年［一五七三］とも元亀三年［一五七二］とも覚書している。また「越之下草」[19]の城端之記では元亀三年説をとっている。

しかし、「三州志」以下はいずれも城端町の草創をいうので、善徳寺の移転をいうものではない。両者混同されて移建と開町があったとする現行流布説となっている。

井波瑞泉寺記録帳収の「善徳寺由来」[20]のような説もある。慶長九年［一六〇四］八月、前田利長が川上地方の鷹狩で善徳寺に宿したおり、実状を見て、敷地を免税地に改めたというもので、善徳寺文書「由来覚書」その他にも記されている。

したがって善徳寺の城端進出と寺地確定は、これより降りることはない。

また、「元禄六年［一六九三］城端町品々帳」には、最も古く町に集まった家々の伝があり、逆算すると天正一〇年［一五八二］前後となる。町家の軒並で町を形成したのはこのころとするのは肯定してよい。

善徳寺の城端進出の背景は、①一向宗の新天地を開拓。②門信徒に川上・一家衆の協力がある。③有力な信仰の外護者がいる。④戦国に対応する攻守とくに防御に適する。などの条件があったようだ。

城端は当時、古来から開拓の進んだ河上地帯の中央に位置し、開墾の進まぬ大扇状地（砺波平野）の奥にあって、背後に五か山を控えている。

五か山はすでに開拓も進み、生産と文化の展開過程にあったので、そこ（梨谷方面）への通路を擁し

（14）由緒略書
永禄二年城ケ端城主荒木大膳之請に依りて福光村より城ケ端へ移住、則大膳より……阿弥陀如来並城門等寄附。

（15）城端御坊御由緒略記
永禄年中第四世祐勝代城ケ鼻城主荒木大膳之請によりて、従福光村城ケ鼻へ移住、……

（16）城端御坊善徳寺由来
永禄二年ノ春福光へ引移リ……（中略）……御掛所ヲ福光ニ残シ城端へ転敷ナリ。頃ハ天正元年ノ年也。

（17）三州志・故墟考
城端は山田・能美二郷の交に在り云々、城端町建初は天正元年といふ……城端町建初は天正元年といふ

（18）掌海拾遺
一　城端建始、元亀三年ト云天正元年也但元亀四年改元天正元年トモ不決也……

（19）越之下草・城端之記
越中州砺波郡城端草創者、元亀三壬申歳也……

（20）善徳寺由来
……天正十六年ニ福光村住ス。其後慶長九年城端荒木膳太夫城跡ニ天正ノ末ヨリ……
慶長九年
はうき（松平康定）
はひ（前田利長）

ているのが城端であった。また、左に石黒庄、右に高瀬庄と山斐郷などの肥沃地を控え、五位庄や守山・伏木方面とも舟便を持っていた。

「天文日記・飛州志」では飛騨白川の豪族・内島氏の勢力は五か山を通じて越中川上に及んだようであり、「生田長次郎氏蔵文書」では、天文二一年［一五五二］五つ谷（五か山）の名主や長百姓層が講を結んで本願寺への忠勤を誓っている。

本願寺としては、これら飛騨白川や五か山の信徒とも結び、かつ井波瑞泉寺を授けて強靭な拠点を固めるとともに、反抗的な戦国大名（守護勢力）に反発するには、地形上からも福光より一歩、居を五か山寄りに進めることが必要であった。

城端の地は、平時には農民居住の中枢部にあたるとともに、非常時にはこの農民を動員して射水・呉東方面へ進出でき、退いて五か山に退避することも容易であった。

また、山田郷と能美郷の中間（善徳寺）の山田川筋、瑞泉寺の庄川筋、永福寺の小矢部川筋を支えて五か山との連携を保った。永禄初めの一向宗は、越後・上杉氏や増山城主神保氏と敵対し、加賀一揆は南の越前朝倉氏に本願寺への通路を制され、連絡は越中、飛騨を頼らなければならなかった。

善徳寺を城端へ招致したのは、荒木大膳・六兵衛・善太夫のいずれかが挙げられるが、創寺を永禄二年［一五五九］とするなら大膳としたい。なお、善徳寺は移建した後も福光を放棄せず、懸所（支坊）を置いて維持を図り、今日に至っている。

四、善徳寺と動乱

川上衆と善徳寺【48】

度重なる戦乱によって川上十郷の信徒の結合はより強固になった。天文一五年［一五四六］ごろ、本願寺の出先機関として金沢御坊（加賀）が置かれ、本願寺法主の指令で加賀・越中は命も惜しまず手足として動いた。

山腹を縫う五か山への路
この要衝を扼する位置にあったのが善徳寺

永禄一二年［一五六九］豪族椎名氏は上杉謙信によって松倉城（越中）を失うと、武田信玄に策応して回復を図った。元亀三年［一五七二］信玄の上洛作戦に伴い、金沢御坊は謙信を越中に膠着させるための一揆活動を開始した。「上杉家文書」によると、一揆軍は、同年五月上杉勢の第一線日宮城（小杉町）を抜いて呉羽山を越え富山に迫ったが、謙信の出陣によって次第に敗退した。

このころの本願寺は、越前朝倉氏、近江浅井氏を助けて織田勢とも対峙しており、天正元年［一五七三］の謙信帰国と盟主信玄の病死によって力を落とした。やがて上杉氏と和睦して、織田氏を共同の敵として戦い、後の石山合戦へと続く。

石山合戦と善徳寺【49】

天正四年［一五七六］以来信長の石山攻撃が本格化する中、同六年三月に謙信が急逝すると越中の去就は乱れた。これに乗じて信長は女婿の神保長住を越中に復帰させ、加賀では柴田勝家らに金沢御坊を覆滅させるなど一揆勢を破らせた。

天正八年［一五八〇］三月、本願寺顕如と信長の和議が成立したが、嗣法教如は不服であって再び籠城を決心し、門信徒に再起の檄を飛ばした。「善徳寺文書」[21]にその檄文がある。「勝興寺文書」によると、四月には顕如が退城を決意したが、教如は大坂死守を決心して門徒の支援を求めている。しかし七月になって信長と和平し、紀伊雑賀に退いた。その直前と思われる同年七月の「善徳寺文書」[22]は本願寺での顕如と教如の和順を指すものであろう。同年八月、信長は佐々成政を越中に進駐させて神保勢を援助させた。成政の川上と五か山方面一揆の孤立作戦が成功し、勝興寺領や増山城なども孤立した。

信長方の越中進出【53】

天正九年［一五八一］上杉景勝を北退させた佐々勢と神保勢は砺波郡に向かい、瑞泉寺・勝興寺を焼いて、一揆勢根拠地の五か山への入口である窪城（井口村）に迫った。「歴代古案」にはその戦況報告があり、一揆勢への景勝の激励文が「藤田氏所蔵文書」に残る。しかし、景勝は出陣しないまま天正一〇年［一五八二］を迎える。「上杉家文書」によると黒金景信（松倉城）は河上一揆勢や瑞泉寺などとの盟約に注力している。これらに心を寄せた小嶋職鎮らが旧主を富山城に幽閉して復忠したのに顧みら

（21）善徳寺文書
今度大坂拘様之儀思立候処、即一味之段誠志之程難忘事候。たとひ……　教如（花押）
天正八年
善徳寺御坊（空勝）

（22）善徳寺文書
不心此度不申上候
（前略）天下不慮之段中々不及是非候。
御心中令推量候。（中略）就中両御所様被成御入眼、有難奉存事候。……　慶心（花押）
天正八年七月
善徳寺御坊

れず、織田勢に攻撃されて五か山に遁れた。

天正一〇年の「善徳寺文書」[23]に善徳寺空勝に宛てた景勝からの一揆糾合と蜂起督促文書にあるように、景勝はこれを一揆蜂起のチャンスとした。しかし越中のほとんどは織田方に占領され、善徳寺も寺領を失ったものであろう。

前田氏の越中進出【54】

天正一〇年［一五八二］六月、信長が本能寺に斃れると秀吉が偉業をうけ、上杉景勝と疎通して本願寺の協力と利用に努めた。この後、佐々成政や前田利家（能登）も秀吉に降ったが、成政は織田家の復興を望み利家と争うことになる。

天正一三年［一五八五］八月、関白となった秀吉は成政を討伐し、神通川以西の三郡を利長（利家の子）に与えた。「瑞泉寺文書」によると、この時に北野村に造立した末寺を瑞泉寺として保護している。

また、利長は北野の市場を城ケ端に移すことを認めるなど、領内の統治・民治に注力し城端繁栄の緒を開いた。

一方前田氏は一揆の武力団結を恐れ、「善徳寺文書」[24]で見られるように天正一五年［一五八七］九州討伐に従軍する際に善徳寺に人質を求めている。寺院や農民が武力放棄したのは、翌一六年からの刀狩や検地によって土着させられてからになる。

本願寺教如と善徳寺【56】

「善徳寺文書」[25]に年次不詳ながら、空勝が本願寺・教如に忠誠を誓った文書がある。

天正一九年［一五九一］になって本願寺は京都に寺地を定め、堂宇を新築し、文禄元年［一五九二］一一月、顕如の急逝により教如が第一二世を継いだ。「善徳寺記録」には空勝が開山影像の厨子鎰役を命ぜられたとある。

秀吉ははじめ教如の継職を認めたが、後に退職させ、准如が第一二世となる。教如は次第に徳川氏に接近し、慶長五年［一六〇〇］関が原の役で家康が勝利すると、家康に同情を訴えて慶長七年［一六

（23）善徳寺文書
飛脚到来得其意候。仍而先達柴田山内相動候処、及防戦数千討捕之由心地好候。次彼徒越中表相動候（以下略）
景勝（花押）
天正十年
善徳寺（空勝）

（24）善徳寺文書
利勝様御出陣付而、御門徒中人質之儀、自金沢被仰越、唯今以御折……
有賀泰介直政（花押）
天正十五年二月十五日
善徳寺

（25）善徳寺文書
態申越候。仍各向後別而御馳走可被申旨、以連署被申上候通、披露申候。……真俗共御馳走可被申事……
善徳寺下六三連署
教如

〇二〕京都烏丸七条に堂舎を起こした。翌年六月から教如は本願寺第一二世を称したという。

善徳寺空勝は一貫して教如に信頼を寄せ、教如は慶長八年七月に「教如寿像」[26]（善徳寺所蔵）を与え、自筆の裏書を添えている。

真宗東派触頭【59】

本願寺の教如と准如の暗闘は、やがて東西両派に分かれていく。善徳寺（教如派）と瑞泉寺・勝興寺（准如派）も同様であり、「瑞泉寺文書」には瑞泉寺から脱落した川上衆を戒めるものがある。また、藩主前田利長は両派の争いを憂え、「善徳寺文書」[27]には関係者を処分した憤書が残る。

なお、善徳寺空勝には子がなく、本願寺の命によって受徳寺（加賀）より因勝を迎えて第五世寺主とした。

その後、藩政初期の寺格争いに発展し、瑞泉寺も大谷派に帰参するなど、多くの川上諸寺が東本願寺に帰属するに至った。

善徳寺の空勝、因勝ともに加賀藩に従順し、藩主の信頼も篤く、慶安二年［一六四九］には越中における真宗本派の触頭となって君臨した。これは伏木・守山・富山などの政治文化の中枢から遠く、なお後進的だった川上地方に大きな影響を与えた。

（26）教如寿像裏書
教如寿像　城ケ鼻村善徳寺常住物也
慶長七年九月　教如（花押）
願主・空勝

（27）善徳寺文書
いわせ（岩瀬）にてはうぐわん（本願）寺もんとおもてうら（表裏）の物あらそへの事うけ給候。……
九月二十日　はひ（前田利家）
三郎兵へ